

……そして入院して二日目の夜でした。息を引きとったのは……。スコールのたたきつける音がすごい夜でした、あの日は……。私も吉岡君と一緒に、あいつが横になっていいるベッドで、そのままぐったりと眠りました。まだ彼の体温が感じられ、スコールのたたきつける音を聞きながら二人仲良く一緒のベッドで眠っているという感じでしたね、あの時は……。

そう言うと、星さんはほんの少し瞳をうるませた。死んでしまった友のそばで共にそのまま眠りにつく。そんな悲しい経験をしたことがない私たちは、一人の大切な友を亡くした男の胸の内に何が、そしてどういう思いが去来してたのかを察することは出来ない。途方もない悲しみなのか、空虚感なのか……。海に夢を求め、共に大海に旅立った二人の若者。その一人が突然、目の前で原因もはっきりしないまま海に散った。

星さんは言葉を続ける。

「翌朝、船の皆が訃報ふほうを聞き病院にきました。そして遺体を引き取り、清寿丸の魚倉に彼をおさめました。三崎に連れて帰るつもりを皆はしてました。水をたっぷり入れ、魚倉のカバーをし、その上に祭壇を作り、清寿丸の船上で彼の葬式を乗組員と婦長さんとで済ませたものが、この写真です」と言って、セピア色に染りかけた一枚の写真を指差した。

「婦長さんは、線香がパラオにはないのでと言って、かとりせんこうを持って来てくれました。それにパイナップルをそなえてくれました。パラオの港で葬式を済ませ、船が三崎に向かっていた時です、無線で連絡が入り、『死体は持ち帰らず水葬にするように』と言われてたのは。

放射能騒ぎで三崎が混乱している時、原因のはっきりしない病人の死体を持ち帰ると騒ぎが一段とひどくなるといった船主側の判断だったのか、それとも単なる国内の検疫側の判断として、死体は持ち込まな

いように、と言われたのかは私たちには判りませんが、結局は、水葬に付すという事になりました。

一旦魚倉に保管した吉岡君の遺体をもう一度魚倉から出して、大漁旗にそれを包んで、スタンションという鉄の棒を三本くり付け、左舷から板をななめにして海にすべり込ませるようにして沈めました……。海がきれいですから一〇メートルくらいは彼が沈んでいくのがずっと見えました。私たちは見えなくなるまでそれを黙って見つめ、そして汽笛を鳴らしながら大きくそのまわりを回って黙とうし、それからゆっくりと三崎港に向かいました。

三崎に戻って、私が新潟まで彼の遺品を届けたというのが、彼に関しての話です……。

星さんは話しながら

「放射能とは関係ないはずと思ってた」と言った。しかし、私たちが持参した『ピキニ水爆被災資料集』の中にある「第五福竜丸乗組員の病状経過」のところを読み通した後、「まったくこのとおりの病状経過だ」と言っただけで驚いた。そして、「水葬にせず遺体を持ち



清寿丸船上での吉岡洋さんの葬式。写真を手にしているのが星さん（『蒼』No.5より）

帰って解剖すべきだったのかも知れませんが、しかし、それでもし、放射能の影響だという事になったら、はたして堂々と公表されたかは、ちよつと疑問ですね」と呟つぶやいた。